

小原國芳の宗教を探る その2

Speculation on Dr. Kuniyoshi Obara's FAITH No.2

坪 田 庸 子

Nobuko Tsubota

目次

はじめに

- I. 宗教的要求
 - II. 宗教の本質
 - III. 神とは
 - IV. イエス・キリスト
 - V. 信仰生活
- おわりに

IV. イエス・キリスト

小原は、昭和28年（1953年）に一度『イエス伝』を書き上げているが、今、手もとにあるのは、1974年に第1刷が出されたものの5刷目である。これは玉川こども図書館の『イエスさま』で、そのはしがきに小原は、次のように書いている。「人類の大恩人としての イエスさま⁽¹⁾」として「われわれ人類の悩み、苦しみ、悲しみを救ってくださる大恩人が、二人おられました。イエスさまとおしゃかさまです。おしゃかさまは、『仏さまは慈悲だ』仰せられました。イエスさまは『神は愛なり』と教えられました。⁽²⁾」又、『玉川道徳教育講座⁽³⁾』では、イエス・キリストを理想的人間の一人として描いている。これらの考え方は他の著書でも繰り返し強調しているもので、イエス・キリストをあくまでも人として、模範的な人として捉えているように見受けられ、私たちがイエス・キリストを神と人との仲保者として受け入れているのとはずいぶん異なっているのではないかと思う。

そこで、まず小原が何故イエス・キリストを信仰の対象であると同じ様に、偉人の一人として見、それを強調しているのかを考えてみたい。

イエス・キリストを偉人の一人として見るのはシュレイエルマッハの影響によるものとも思われる。何故ならば、大島豊が『シュレイエルマッハの信仰論⁽⁴⁾』の中で次のように取り上げているからである。即ち「キリストの如き人の現われたのは、人間性の最高意義を保存しようとする法則の働きの結果として考えられなければ

ならない。同様に人類の精神生活に大なる影響を及ぼした偉人等も亦、キリストの場合に類比して考えられるべきである。併しキリスト以前に現われた宗教的偉人等は皆、キリストのうちに没したので、キリストの名に依ってのみ彼等の存在理由がある。確かにキリストは人間であったので、その人間性のうちに神の性質を取り客れる可能性を共有していなければならない。⁽⁵⁾」偉人の一人であると同時に神の子であるということ、小原も又、イエス・キリストが人としての理想像であると同じように神の子であることを認めている。例えば、次のように「神の子と呼ばれるほどのキリスト、換言すれば神の顕現であるキリスト、宇宙の大法の体現者としてのキリスト、従って、悩み、苦しみ、悲しみ、悶え、それらの一切から人類を救済して下さる救主のこの御誕生を祝し奉る深い意味を理解してもらいたい。⁽⁶⁾」とのクリスマスの説教などであるが、小原は数多くの著書の中でイエス・キリストの生涯を描くことがあってもイエス・キリストを神学的に論じているものは見当たらないように思う。

さらに、イエス・キリストの生涯を取り上げてはいるものの、小原のイエス伝は十字架にかかるまでのイエスである。私たちの罪の一切を背負われて十字架にかけられたのだということ、「『十字架を背負うて吾に従えよ。』ホントにわれわれは人生のあらゆる場面において、十字架を背負わねばならぬのだ。⁽⁷⁾」というように、クリスマスの説教においても、「クリスマス祝するに当って、われわれは喜びと同時に、人生の苦しさと戦と十字架の意義を十分に知らなければならない。⁽⁸⁾」イエス・キリストの誕生から十字架まで、イエスの生涯における行為と教えを重んじているのである。

例えば、マタイによる福音書4章10節「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拜した神にのみ仕えよ』と書いてある。」40日40夜の断食後の荒野の誘惑の話から、「わたしたち、心のよわい人間はたびたびあくまにおそわれ、悪い心がおきてきます。ねたみ、なまけ、ぬすみ、わがまま、ひがみ、よくばり、ごうまん……など、

そのようなとき、勇気をだして『サタンよ、しりぞけ。』と心にさげんで、かならず勝ってください。負けてはいけません。⁹⁾』と、前述の『イエスさま』でこどもたちに教えている。さらに小原の著書の中にはカナの婚礼の奇跡(ヨハネ2:1~11)、宮きよめ(ヨハネ2:13~22)、ヤコブの井戸の話(ヨハネ4:6~26)、ガリラヤのみずうみでの大漁(ルカ5:2~11)、などのイエスが行なった多くの奇跡、イエスが話したさまざまなたとえ話、そして山上の垂訓等を引用している。

私たちが聖書を通してイエス・キリストの生き方を学び、イエス・キリストを通して神からのみ言葉を聞くのであるが、小原はあくまでもイエス・キリストの全人格に倣って生きようと努め、イエス・キリストの教えを実践してきた人である、と認めざるをえない。

信仰は、キリスト者としての信仰はイエスの生き方、精神を実現することにあると思うのである。

この小原の生き方は佐伯晴郎が『日本のキリスト教の今日の実践』の中で書いているイエス像に似ている。「イエスは、このイスラエル民族の伝統と歴史の中に生まれ、育ち、旧約聖書の教えを尊重しましたが、彼のユニークさは、それを言葉として教え、律法として命じるのではなく、それを身をもって実践し、それを生きることにあつたのです。このイエスのあり方は、理論よりも実行を重んじたというふうな、いわば実践主義という言葉で言い表わせるものではありません。彼においては、真理そのものが、プロセスにおいて力づくよく生きて働いているのです。このことをヨハネによる福音書記者はみごとな表現で簡潔に言い切っております。『言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った』(ヨハネ1:14)。イエスにおける言の受肉とはイエス・キリストの福音と私たちの出会いということにあります。¹⁰⁾』というということであり、さらに、「イエスを知るということはわたしを愛し、わたしのために、ご自身をささげられたということを知ることであり、そのような人格的愛の認識であります。¹¹⁾』私たちはイエスが私たちの罪を背負われて十字架にかけられた、その深い愛、そのことはまた「神はそのひとり子を賜わたったほどに、この世を愛して下さった。」(ヨハネ3:16)を理解することになるのである。この愛の大きさを理解したものは、その愛を実践しなければならない。

キリスト者とは神学者や牧師だけをいうのではない、一般信徒もいるのである。イエス・キリストを神学的に論じていないからといってそれを排斥する権利は何人も持っていないはずである。信仰は神と人との関係である。

小原の場合は、神学者でもなく牧師でもない、イエス・キリストを論ずるのではなく、イエス・キリストを歴史

的人物として、その教えを学びイエスの生き方を実践する人であると思う。私たちキリスト者はイエス・キリストを抜きにしては存在しえないのであるが、それと同時に、私たちは世俗的な生き方をしているものでもあるために、その中にあってジレンマ、葛藤があり、小原のいうざんげがあり、罪に打ち勝つ神の恩寵を待つものである。

小原は罪と恩寵について次のように述べている。「キリスト教では罪とは汚れた心の状態をいうのでありまして、全く精神上のものとなって来たのであります。罪の自覚ありてこそ、人生の向上も進化もあるのです。これを心理学的に説明しますと、罪の過程は、一、苦痛、二、罪、三、正しさに対する懇願、四、懺悔となるのであります。実に懺悔は救済であり、解脱の唯一の道であります。それゆえ、懺悔とは真理追求の声であり、神を求むる願いであります。¹²⁾」前述の『イエスさま』ではもっとわかりやすく、「イエスさまの十字架の死は宗教的には一、罪をおかすわたしたち人間がうけねばならぬ罪を、身代りにうけてくださったのです。二、神さまにゆるして頂き、神さまに近づくためのありがたい深い愛のあらわれです。このことによって私たちが、正しいよいことをするための力が、あたえられます。¹³⁾』といている。

イエス・キリストの十字架があるならば、聖書に書いてあるように、「あなたがたは彼を不法の人人の手で十字架につけて殺した。神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせたのである。」(使徒行伝2:23~24)、「あなたがたが十字架につけたこのイエスを神は、主またはキリストとしてお立てになったのである。」(使徒行伝2:36)と復活が書かれていなければならないと思うのであるが、何故であろうか、やはり、シュライエルマッハの影響を受けているのであろうか。前述の大島豊の『シュライエルマッハの信仰論』によると、「キリストの復活、昇天、審判に帰る約束、等はキリストを信ずる事と直接的な関係なく、また彼の贖罪する力と何等の連絡が無いので、彼の人格に関する原理の部分を構成する事から除外されるべきである。¹⁴⁾』といい、「弟子達がキリストを信じたとは之等の出来事を期待したより前であつたので、其後の基督信者もまたキリストの信仰に取って之等の期待が重要ではなかったからである。キリストの昇天は、特殊なるキリストの価値を表現したものに過ぎなく、またキリストの再臨は、キリストと結合された云う憧憬を満足させる為に役立ったのである。即ち重要な点は、イエスへの信仰がキリストに関する特殊なる敘述、或は彼の行動から発生したのではなく、彼の人格全体の印象から生じた事である。¹⁵⁾』ということなのである。

小原が前述のようにイエス・キリストの奇跡の数々を

引用していることについても大島豊の著書によると「我々に取ってキリスト在世当時の一切の奇蹟が、彼の出現と云う一の偉大なる精神的奇蹟の内に完結したのである。なお又、キリストの出現が、一切の奇蹟の最後である。何故ならキリストに依って贖罪が完成されたので、神との交りに関する限り、人類の為に用意されたる如何なる事もキリストの業績の其後の発展としてのみ考えられる故である。⁹⁸」ということなのである。即ち、小原はイエス・キリストの奇蹟というよりも、イエス・キリストそのものが神のひとり子として信仰の対象であったのである。

「人間に従うよりは、神に従うべきである。わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、そして、イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自分の右に上げられたのである。」（使徒行伝5：29～31）、「神はナザレのイエスに聖霊と力を注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら……」（使徒行伝10：38）ここで神と人との関係がイエス・キリストによって結びつけられていることが理解される。このことはさらに「御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである。」（ローマ人への手紙1：4）で明らかにされるのである。

ハインリッヒ・オットは彼の著書『神』の中で「われわれはナザレのイエスをとおして事実神の声を聞いているのである。イエスにおいて神は実際に出会ったのであり、さらに出会うのである。イエスにおいて現われ、イエスにおいてわれわれに語りかけられたように、神は存在するのである。⁹⁹」といているが、小原はイエス・キリストの復活が大きな意味をもたらすものであることにはふれていないのである。

私たちはイエス・キリストの生涯を通して完き人としてのイエスを見、それに倣うものであらうと心がけるが、それ以上に復活のイエスが私たちと共にいるということが私たちの信仰を支えていると思うのである。聖書にも書かれてあるように「もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる。」（ローマ6：8）、「このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだものであり、キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを、認むべきである。」（ローマ6：11）

H・オットもいう「『神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト

・イエスである。彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられた。』（1テモテ2：5）。われわれもキリスト教徒でない人たちの秘められた神との出会いをキリストに照らして理解し解釈しなければならない。神がイエス・キリストにおいて現われたように、人間と果してもなく連帯する方として（十字架）、そして人間に果してもない希望と将来を開く方として（復活）、彼らに出会う場合には、神はこれらの人間にも出会っているのである。¹⁰⁰」

小原は歴史上のイエスを通してその福音が心に触れ、神と出会っていたのだと思うのである。

キリスト者といってもさまざまなイエスのとらえ方がある。小原の場合は、シュライエルマツハアやベスタロッチの影響が大であり、ベスタロッチのキリスト観について論じているところを見ると「救世主及びキリスト教観、実に失なわれたる兎的感情の復興は地上に捨てられたる神の子の救いである。さらにキリストについては彼は詳しく述べていなく『失われたる兎的感情の復活者であり』『神の犠牲となれる俚侶であり』『神と人との間の和解者であり』その教訓や純粹なる正義にして、それは人に対する教訓的哲学であり、神より人への天啓であるといっている。¹⁰¹」ここで、小原は私たちが放蕩息子的な立場のものであること、イエス・キリストはそのような私たち人間と神との仲保者であることを認めているのである。

即ち、イエス・キリストは聖書にあるように「神の子」（ヨハネ3：16）であり「人の子」（ヨハネ3：14）であるという二重性を持っているのであるが、ヘーゲルが『キリスト教の精神とその運命』の中でいっているように、「子の父に対する関係としての、イエスと神との関係は、人間が神的なものを全く自己外に置くか否かに従って、認識として捉えられ得るか信仰として捉えられ得るかのいずれかである。¹⁰²」この点で小原は神と人との関係は神の贖罪がイエス・キリストの十字架によって成就されたことを認めるものであり、ベスタロッチのいう神の放蕩息子としての人間、すなわち父と子の関係であることを認める。そのためには和解者としてのイエス・キリストがどうしても必要となるのである。

V. 信仰生活

小原は鹿児島師範時代にランシング宣教師に出会ったことによって信仰の種子が植えつけられた。小原はランシング宣教師との出会いを次のようにいっている。「宣教師ランシングさんに巡り会ったのが魂の救いの始めです。¹⁰³」とさらに、「さて、日曜学校を、カゴシマの学生以来、20年以上も教えていました。礼拝説教を40年、計60年。自ら『旧約聖書』にも親しみましたが、今、玉川

で、小・中・高・大学・短大・教養・学部と一週に7回のお説教、『四福音書』を中心にそれぞれ年齢に応じて砕いて講釈しています。漸く、80にもなってシミジミとカラシ種子ほどの信仰の有がたさが少しずつ分かり出しました。⁸²ランシング宣教師に植えつけられた信仰の種子は尾島真治牧師からの受洗、さらに日曜学校の教師として用いられることによって育てられたのである。

著書の中で明らかにされている教会生活は鹿児島師範時代の尾島真治牧師が牧する日本基督教会、香川師範時代には日本基督教会の高松教会（当時今村好太郎牧師）、京都時代には日本基督教団の洛陽教会に出席していたとある。

小原が洗礼を受けた尾島真治牧師は晩年、(明治37年・1907年)渋谷に移り、生命中心の伝道を始めた人である。尾島牧師が始めた日本基督会の信条は、「我は、全知全能の生命にして全徳の主なる神を信ず。我は、父なる一柱の神を信ず。我は天地の創造者、一柱の神にして、又神の独子清き霊によりて胎める処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトの時に苦しみを受け、十字架に釘けられ、信ずる人に代り贖となりて生命を与え給い、陰府に降り、三日目に甦れるものうちより起され、天に昇り、父なる神の右に坐し、彼処より生けるものと死ぬるものを審き給わんが為に来り給うイエス・キリストを信ず。我は清き霊なる一柱の神を信ず。即ちこの三柱の神は並せて独神にありまして、霊なり。我は、清公会即ち清徒の交り、罪の赦しと清め、常々の生命、肉体よりの甦りを信ず。アーメン。⁸³」

この信条は昭和20年に制定された日本基督教団の信仰告白と形式内容がほとんど変わっていないことに気づかされる。しかし、日本基督教会は日本基督教団創立の際には信条が異なるとして離脱して日本基督会となったのである。

小原の『夢みる人』⁸⁴によると、「尾島真治の主張することは、日本人としての独立の信仰がなければならない。ミッションから補助を受けるのも悪くないが、ウツカリすると人間の魂が奪われる。魂が腐ってしまう」と、とうとう補助を断って独立教会を主張された⁸⁵。」ということであるが、小原の信仰はこの日本基督会の信条の中にある「三柱の神（父・み子・み霊の）は一人の神である」というところに凝縮されているのではないだろうか。神と私との関係にあるということである。

いつも小原がいつている「ケン種子(粒)」ほどの信仰とは何者にも邪魔されることのない神と私との関係なのである。そしてこの関係の中において人間イエス・キリストの生き方を模範として倣い実践したのが小原なのである。

「わが半生、苦しみと悩み。それが八分であった。その間に微かながらもキリスト教の信仰が救ってくれた。勇気と希望が与えられた。そしてそれらを一貫して、赤い赤い夢。燃えるような熱い夢が、ほとんど一刻も絶え間なしに縦貫している。この夢がいつも私を鞭撻し、導いてくれた。⁸⁶」と家庭的な不幸、事業上のさまざまな困難の中にあっても、それを乗り越えさせたものは「ケン粒ほどの信仰」だったというのである。

「夢みる人」と自分でもいつているように果しない夢を一つ一つ実行し、完成させていった。まさに実践の人なのである。

「ヤソ臭くないと云われます。はなはだしいのは酒は飲むの、離婚もしたの、仏教の話もするの、ヤソ教の悪口も教会や牧師の悪口もいうし、おまけに人の悪口もいうし、どうもヤソ道徳らしくないといわれます。でも今の苦しい中に、物質と時間と誤解と失望とに対し、こうやって戦っていけるのは、これでもケン粒ほどしかない信仰ですが、神を信ずればこそです。キリストの教えに則ることが少しでも出来るからです。しかも私は一般の信者のように、ただ呑みに聖書を信じたくありません。いわんや、ただ単に酒を飲まぬこと、タバコを吹かぬことを信者と思うような軽率な考え方や、ことにただ消極的な隠遁的な禁欲的な頑固な見方には反対します。⁸⁷」このように小原自身、多くの人たちの中傷や誤解を受けていることを知りつつ、自分の信念を貫き通したのである。小原がいつもいつている「ケン粒ほどの信仰」が小原の多くの困難を克服する原動力となっていることが理解されるのである。

信仰とはまさにこのようなものでなければならないと思う。

「信仰とは、ただ信仰の箇条や教義を知的に承認することにつぎるのではなく、むしろイエスとの出会いによって、わたしたちの生が根底からゆり動かされ、転回せしめるといふべきごとを根拠とし出発点として、新しい生活への歩み出しが始められるところで成り立つものです。⁸⁸」信仰とはあれこれ論ずるよりも、まず神と出会い、イエスに倣い、そのことの中において生きることであると思うのである。

「キリスト教の信仰はキリスト教を信じて『生きる』ことであり、キリスト者の『実践』も『伝道』も、キリスト者として『生きる』ことによってはじめてなされるものであり、キリスト教の信仰はキリストにある『いのち』（ライフ）であり、それが日に見えない内的なものとしてとらえられる時には『生命』となり、それが外にあらわれて一定の形をとるときには『生活』となるのである。⁸⁹」

さて、私は小原のキリスト者としての生活を見る時、小原の91年の生涯を貫いた「ケン粒ほどの信仰」は夫人である小原信によって支えられてきたところが大きいと思うのである。

小原信は自由奔放な小原のかたわらにあっていつもひかえめでありながら、信仰厚く聖書の教えを守られ、学校経営の幾多の危機の際にも決して動じることのない人だったといわれる。

小原信は山口市の牧師高井太の長女として生れ、梅光女学院・女子学院高等部を卒業後、朝鮮平壤の女学校の教師を経て、大正7年4日、広島の中高等女学校の教師となり、その地の教会で小原と出会うのである。大正8年小原が沢柳政太郎の招聘に応じて上京、牛込の成城小学校の主事の時に結婚、その時から小原信の実家の父、弟たちが一体となって小原をバックアップし、小原の玉川の丘の開拓と夢の実現のために小原に献身することになるのである。玉川学園女子塾塾監として、学園の理事長、学長事務取扱い等の要職をつとめ、実に小原の片腕となったのである。

玉川大学出版部の月刊雑誌「全人教育」339号に書かれてある多くの人たちの小原信に対する追悼の言葉からも彼女がいかに信仰深く、いかに小原を愛し、忍耐強かれを支えたかが理解されるのである。例えば、「興亜工業大学事件も最後は理事会において小原先生を玉川学園から他に転出するよう勧告された程でありました。そうした折、おばさまが『たとえ校舎がなくなり、それが灰になったとしても、その灰の中からマコトの教育の種を蒔き育てて行きましょう』と力強く励まして下さいました。⁸⁰」とか、「成城草分け時代から、玉川の今日まで、小原先生の陰で、奥様がどれほどお心をつくされたことか、量りしれません。如何なる苦難にも耐えられて、何ものにも動じられず、毅然としておられたお姿を思い出して、追慕の念でいっぱいです。先生も、しみじみと『そうだよ、瀉君、俺だけでは何も出来なかった。おばあさんがなあー俺もよく雷を落としたけど、よくガマンしてくれたよ。おばあさん居なかったら、玉川もこんなに立派にはならなかったろう』と言われて涙されるのです。⁸¹」と、そして「いつも心にあるのは学園のこと、塾生のことだったのですが、それが床に就き、再び立ち上がれないと解った時は一番つらかったのでしょう。私が寝台に近寄り、肩を少しもんでやった時、その手を押し止めて言いました『寝ていても何も出来ないね。だが寝ていても出来ることがあります。他の人のことを祈ることですよ』と。姉はもはや再起出席ない床の中であって、苦しい時にも、なお他のために祈っていたのです。その信仰の深さ、愛の強さを感じました。⁸²」このように三人

の追悼の言葉の中から小原信の人柄が偲ばれるのである。そしてこのような夫人によってこそ小原は信仰生活を完うすることができたのだと思うのである。

おわりに

私はこれまで小原が何故宗教を求め、どのようにして宗教をとらえ、神をとらえ、そしてイエス・キリストをとらえたか、ランシング宣教師から与えられた信仰、「ケン粒ほどの信仰」といつも謙遜しているその小原の信仰について学んできた。人は小原をキリスト教ではないと評し、小原自身もまた自分は狭い意味のキリスト教ではなく万有在神論者であるといっている。がその神はあくまでもキリスト教の神であり、小原が「人になれ、人になれ」といっていることは完き人としてのイエス・キリスに会うようにといっているのではないかとの思いに達したのである。そこで、おわりにあたってもう一度、シュライエルマッハと西田幾多郎に遡って考えてみたいと思う。

小原は「人になれ、人になれ」といいその人はシュライエルマッハの「人」に通じるといっているのであるが、聖書にもその「人」が描かれているのである。

「キリストにあって救われ、新しく生きる人間にとっても『からだ』は大切な意味を持っています。だからパウロも『自分のからだをもって神の栄光をあらわしなさい。』（Ⅰコリント6：20）また『あなたのからだを神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。』（ローマ6：1）とすすめているのです。この場合に『からだ』ということばでパウロは、人間が『生きる』ことの全体をさしていることはあきらかです。聖書の人間はつねに『霊』と『こころ』と『からだ』よりなる全体的人間です。⁸³」聖書は私たちにイエス・キリストに倣う生きた人間を求めているのである。

大島豊の『シュライエルマッハの信仰論』によるとシュライエルマッハのキリスト自身と基督信者の関係に対する見解は次のようなものであるという。「其一は、基督教に於ける一切が我々の人間生活の領域に降臨したと云うキリストの史的事実並びに人としてのキリストが与えたその根本的印象に関連される、と彼が言っている事である。而してその印象が基督教会に保存され、且つ教会に入った人々に伝えられる事に依って世界に永続させられる、と彼は述べている。其二は、イエスが独自の神一意識を有した事及び信者に伝えられた彼の神一意識が信者にとって贖罪となる事、等に依ってキリストと基督者との関係を表現している。其一の見解は、信仰とは個人的対象に向けられた個人的行為である、と云う思想と関連している。其二の見解は、キリストは連続的

系統に於ける第一の存在である、と云う思想と一致している。前者の場合に於て、イエスは信者に対して神の関係を保持すると考えられ、後者の場合に於てイエスは信者に対して主型的関係に立つと考えられる。前者にありては基督教がキリストへの態度であり、後者にありてはキリストが基督教である。⁶⁴このように大島豊はシュライエルマッハの信仰を批判的に見ているのであるが、大島豊の考えはさらにシュライエルマッハの基督教観が今日一般的に神学者等から邪道であると非難され、それが聖書的でないと反駁されるのは、「基督教意識はイエス自身の神一意識の継続であると考えられたのだから、先づ第一にイエスの自一意識を吟味しなければならない筈である。而して之は、共観福音書に示されたるイエスの史的事実から離れては成就され得ないのである。然るにシュライエルマッハは此の当然の筋道に進まずに、キリストに関する教義的再構成へと退歩したので、彼の史的解説が失敗に終り、そのキリスト論が独断論的に墮した訳である。⁶⁵」としている。

小原はこの点でシュライエルマッハとは異なる、小原は共観福音書を大切に、イエスの実生活を重視しているのである。

大島豊はさらに言及する、「自一意識から独立的なものに基礎付けられたる真理を主張する事は宗教に関係が無いと云うシュライエルマッハの課題は、『宗教とは絶対帰依の情である』と云う公式に簡約された如く、彼に取って思惟に属する一切が厳正なる意味の宗教外に存し、且つ福音の信仰と感情とを彼は同一視した。⁶⁶」と「信仰は宣言されたる使命から生長する事、及び信仰は示に就いての思考の新しき仕方である悔悟に依って表現される事、等が予想される。聖書は之等の事で初めから終りまで満されているが、併しシュライエルマッハの意味する感情及び経験に就いては實際何等聖書の内に見出されないのである。聖書及び宗教改革者等の啓示は、神の驚くべき超自然的知識の伝達分与であり、而して信仰は人間経験及び人間的聡明に相反する神からの之等の伝達を正しく保持するにあるので、之は正にシュライエルマッハが排斥する事に等しい。⁶⁷」小原はシュライエルマッハの影響を受けていることはすでに明白なことであるが、シュライエルマッハが主張する「宗教とは絶対帰依の感情である」ということと聖書の中のイエスの十字架による贖い、自己の罪を悔い、新しく生きること、ここに小原の中にある「反対の合一」(coincidentia oppositorum) が明らかになってくる。

さらに「反対の合一」で忘れることのできないのは小原の萬有在神論である。クリスチャンでありながら、私は萬有在神論者であるといわせるものはいったい何であ

ろうか。

「宗教の本質が、神の理想への我々の信仰である限り、現実存在なる我々自身が理想化せんとする人間的生活努力であり、此の努力が単なる個人的安心立命か社会的救済に及ぶ事に依って全うされるのである。斯かなる神は超越的存在であると共に、我々の内に生きる内在的力である筈である。神は永遠的なロゴスであると共に、人間の内的なるアガペー(愛)の精神でなければならぬ。而して愛の精神は、社会的に働くのが其の本性である。人生に対する宗教の価値は、人間社会の道徳的、芸術的、経済的、政治的な福祉への手段としてのその効果を考慮に容れぬなら、真に理解されるものでない。⁶⁸」ここにある内在と超越的存在は、小原が主張する超越性と内在性⁶⁹から万有在神論の宗教への関連性を促すものがあるというのだろうか。次の西田幾多郎の神の内在性と超越性に関する考え方はどうであろうか。

「神の信仰を有つ人は、必らず何等かの意味で神の超越性を信ずるであろう。しかざればそれは先生の神が、弁証法的神学の神のように、遠き神、恐れ神であるというのではない。もと禪の体験を有たれる先生の神が、かかる神である筈はない。我は神の自己射影点であるという先生にとって、神は単に超越するのではない。神はある意味で内在するのである。しかし神は単にまた内在するのではない。超越の絶対否定としてのみ内在するのである。内在の意味が異なるのである逆になるのである。神が世界に内在するのではない。言はば世界が神に内在するのである。先生の宗教は汎神論ではない。むしろ逆に神に於て万物を見るのである。Pantheismusではなくして万有在神論 Panentheismus(論文集第7, 111頁)なのがある。すべては神に於てあるという限り、逆に神はすべてに於てあると云えよう。しかしすべてを包む神は、すべてをつつむと共に、すべてでない。かかることはそれ自身が絶対の矛盾であろう。しかしそれが神の存在の事実であり、また我と世界の存在の事実である。それ故に、我は自己の絶対を躡すことよってのみ、神を見、死してのみ生きるのである。多くの宗教的世界観に於て、深い矛盾に会うのはそのためであろう。例えばキリスト教に於ては、神は己に似せて人間を造ったのであり、この世界は神の創造である。そこに悪のある筈はない。⁷⁰」

ここに至って小原の宗教、小原の主張する万有在神論が西田幾多郎の考えから出ていることが理解された。さらに「反対の合一」、「絶対矛盾的自己同一の世界⁷¹」もまた西田幾多郎の宗教観であると高坂正顕が指摘する「慧玄會裏無生死であり、大燈國師⁷²の『億劫相別、而須臾不離、盡日相對、而殺那不對⁷³』に至ってその究極に

達したのである。⁴⁴⁾に由来するのではないかと思うのである。

信仰は神と私との応答であると思う。神の呼びかけに対して私たちはその全存在をかけて答えなければならないのである。その応答によって私たちは日々新たにされるのである。人間イエス・キリストの良き行い、完き行いを倣い、御力によって、死人からの復活によって、神の子となられたイエス・キリストとともに生きることである。

最後に、小原の宗教のとらえ方がシュライエルマッハと西田幾多郎の影響を受けていることは確認できたのであるが、小原の神、小原と神の間には人間イエスが大きな場所を占めている。イエスを神の子と認めながらも復活のイエスが描かれていないために、そこには何ともいいがたい空間が広がっているように思えるのである。これを小原がいう絶対矛盾的自己同一というのであろうか。

小原の宗教は、というより、小原のキリスト教は、ランシング宣教師によって蒔かれた信仰は、幼な児のように純真な心で受けとめられたイエス像がそのままに生きているのである。イエスが幼な児を愛したように小原も子どもたちを愛した。そしてその愛する子どもたちのために、自分が愛してやまないイエス伝を書き、子どもたちにこれを伝えようとしたのである。

イエスが十字架の死にいたるまで父としての神に従順であられたこと、貧しい者、虐げられた者の友となり、何の罪もないのに私たちの罪を背負われて、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ15:34)と最後まで人間イエスとして死なれたことに対する懺悔と感謝。さらにその人間イエス、完き人間イエスを死から甦らせ、今にいたるまで私たちとともにおられたもう神への感謝が、小原の信仰であると思うのである。

『夢みる人Ⅲ』が未刊のため玉川学園での教会生活は明白化されてはいない。玉川学園の礼拝堂での説教が続けられたとしかどの著書にも書かれていないのである。

小原の玉川学園葬では、「俺の時は必ず歌ってくれよ」といわれたという讚美歌87Bが歌われた⁴⁵⁾。

「めぐみの光は、わがゆきなやむ、
やみ路を照らせり、神は愛なり、
われらも愛せん、愛なる神を」

引用文献・参考文献

小原國芳著

- 『教育の根本としての宗教』 玉川大学出版部 昭和55年版
 『秋吉台の聖者本間先生・玉川塾の教育』 玉川大学出版部 昭和53年版
 『塾生に告ぐ』 玉川大学出版部 昭和53年版
 『教育論文・教育随想 (2)』 玉川大学出版部 昭和48年版
 『教育論文・教育随想 (3)』 玉川大学出版部 昭和48年版
 『教育論文・教育随想 (7)』 玉川大学出版部 昭和44年版
 『教育論文・教育随想 (8)』 玉川大学出版部 昭和48年版
 『小原國芳自伝 夢みる人 Ⅰ』 玉川大学出版部 昭和55年版
 『小原國芳自伝 夢みる人 Ⅱ』 玉川大学出版部 昭和55年版
 『イエスさま』 玉川こども図書館 玉川大学出版部 1981年版

小原國芳編

- 『玉川道徳教育講座 理論篇』 玉川大学出版部 昭和53年版

大島豊著

- 『シュライエルマッハの信仰論』 第一書房 昭和9年版

高坂正顕著

- 『西田幾多郎先生の生涯と思想』 弘文堂 昭和22年版

西田幾多郎 全集11 (哲学論文集 第7)

- 岩波書店 昭和40年版

ヘーゲル著 信太正三訳

- 『キリスト教の精神とその運命』 創元社 昭和25年版

H・オット著 沖野政弘訳

- 『神』 新教出版社 1977年版

菅隆志・森野善右衛門編

- 『日本のキリスト教の今日の実践』 日本基督教団出版局 1972年版

雑誌

- 小原國芳監修「全人教育」339号 玉川大学出版部 昭和52年7月号
 小原哲郎監修「全人教育」348号 玉川大学出版部 昭和53年3月号

相賀徹夫編

- 「万有百科大辞典・宗教」 小学館 昭和49年版

注

- (1)(2) 小原國芳著『イエスさま』 玉川大学出版部 1981年版 はしがき。
 (3) 小原國芳編『玉川道徳教育講座 理論篇』 玉川大学出版部 昭和53年版 324頁。
 (4)(5) 大島豊著『シュライエルマッハの信仰論』 第一書房 昭和9年版 99頁。
 (6) 小原國芳著『塾生に告ぐ』 玉川大学出版部 昭和53年 541頁。

- (7) (6)と同じ, 160頁。
 (8) (6)と同じ, 164頁。
 (9) (1)と同じ, 34頁。
 (10) 菅隆志・森野善右衛編『日本のキリスト教の今日的実践』日本基督教団出版局 1972年版 150頁。
 (11) (10)と同じ, 151頁。
 (12) 小原國芳著『教育の根本問題としての宗教』玉川大学出版部 昭和55年版 242～248頁。
 小原國芳著『教育論文・教育随想(3)』玉川大学出版部 昭和48年版 95頁。
 (13) (1)と同じ, 125頁。
 (14) (4)と同じ, 192頁。
 (15) (4)と同じ, 192頁。
 (16) (4)と同じ, 197頁。
 (17) H・オット著 沖野政弘訳『神』新教出版社 1977年版 121頁。
 (18) (17)と同じ, 121頁。
 (19) 小原國芳著『教育論文・教育随想(2)』玉川大学出版部 昭和48年版 431頁。
 (20) ヘーゲル著 信太正三訳『キリスト教の精神とその運命』創元社 昭和25年版 107頁。
 (21) 『教育論文・教育随想(7)』玉川大学出版部 昭和44年版 54頁。
 (22) (21)と同じ, 139頁。
 (23) キリスト教新聞社編『キリスト教年鑑 1982』 141頁。
 (24) 小原國芳著『夢みる人 Ⅰ』玉川大学出版部 昭和56年版。
 (25) (24)と同じ, 159頁。
 (26) (19)と同じ, 80頁。
 (27) (19)と同じ, 336頁。
 (28) (10)と同じ, 10頁。
 (29) (10)と同じ, 39頁。
 (30) 小原國芳編 雑誌「全人教育」339号 玉川大学出版部 昭和52年7月号 (前田浩一氏の追悼文) 26頁。
 (31) (30)と同じ(潟山盛吉氏の追悼文) 20頁。
 (32) (30)と同じ(高井望氏の追悼文) 25頁。
 (33) (10)と同じ, 48頁。
 (34) (4)と同じ, 285頁。
 (35) (4)と同じ, 287頁。
 (36)(37) (4)と同じ, 290～291頁。
 (38) (4)と同じ, 295～296頁。
 (39) 本紀要第18号58頁次下拙稿。
 (40) 高坂正顕著『西田幾多郎先生の生涯と思想』弘文堂 昭和22年版 319頁。
 (41) (40)と同じ, 323頁。
 (42) 宗峰妙超(1282—1337)南北朝時代の臨濟宗の僧。臨濟宗大徳寺開山。播磨国の人。勅諡号を大燈國師という。(相賀徹夫編『万有百科大辞典4 哲学宗教』小学館 昭和49年版 259頁)
 (43) 西田幾多郎著 全集 11卷(哲学論文第7) 岩波書店 昭和40年版 399頁
 (44) (40)と同じ, 323頁。
 (45) 小原哲郎監修 雑誌『全人教育』348号 玉川大学出版部 昭和53年3月号 34頁。